

第29期社会教育委員の会議

第7回定例会

議事録

令和4年1月26日

【１】開催日時

令和４年１月２６日（水）１８時００分～２０時００分

【２】開催場所

リモート会議

【３】出席委員

坂倉委員（議長）、堀井委員（副議長）、小泉委員、奥平委員、鍵和田委員、村上委員、権田委員、吉岡委員、新海委員

【４】出席職員

教育委員会事務局

谷澤生涯学習・地域学校連携課長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【５】傍聴人

無し

【６】次第

- １ 第６回議事録の承認
- ２ 活動報告書（案）の検討について
  - （１）概要説明
  - （２）意見交換
- ３ その他

○事務局 本日の欠席者はお一人となりますので、議長、よろしくお願いいたします。

○議長 皆さん、こんにちは。もう第7回目で、あと残り1回ぐらいということで、ほぼ終了になってきますけれども、皆さん、お忙しい中、本当は対面でお会いできれば、いつものとおり結構濃い、濃密な議論ができたと思いますが、オンラインだと多少話しにくいところもあるかもしれませんが、あまり急がず、丁寧にいろいろ御意見を伺っていければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

議事に沿って進めていこうと思いますが、いつものとおり速記の方が議事録を起こしてくださいますが、今日はオンラインなので、発言の冒頭お名前をおっしゃっていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ということで、まずは前回、第6回の議事録でございますが、既に皆さんに事務局の方より送っていただいております。何か問題はありませんか。特段なければ御承認いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

第7回、本日の議事録の署名については、大変恐縮ですけれども、奥平委員と鍵和田委員にお願いできればと思っております。後日、事務局から署名用紙が送られるはずだと思いますので、よろしくお願いいたします。今日は修正がないので、後ほど正式な前回の議事録が送られてくると思います。

冒頭、お話ししましたが、もう残り僅かなので、そろそろ報告書の取りまとめをしていくことになります。お手元に報告書（案）をお送りいただいていると思いますが、皆さん、お持ちでしょうか。事務局の皆さんと相談して、これまでの議論をまとめていく形で整理させていただきました。お目通しいただいているという前提で議事を進行していきますが、気になるところとか、もっとこうしたほうがいいのかということを今日は議論できればと思っております。

まず、私から、これがどんな構成になっているかというのを共有できればと思いますが、その前に、いきなり議論というのもあれなので、ちょっとだけ話題提供というか、おやまちプロジェクトはこの会議でも結構皆さんに議論していただき、前回の委員会でちょっとお話ししたと思うんですけれども、中学校のプロジェクトで、総合学習の時間で、まちのテーマで提案をして、実際本屋さんのいろいろなプロジェクトをやることになり、小学生が一日小学生店長として関わるみたいなことが起こりつつあるというお話をしたかと思うんです。今チャットでユーチューブのURLをお送りしたんですけれども、イッツコム取材が入って、その紹介動画。短い4分ぐらいのものですが、紹介されましたので、今見

てもいいですけども、もしよければ後ほど御覧いただければと思います。

報告書（案）ですが、全体のおさらいも含めて、1章、2章は構成のおさらいです。

まず1章については、1章の1が「おやまちプロジェクト」現地視察と意見交換会、こういうプロジェクトであるということや、そこでの第1回目か、2回目の意見交換をまとめています。そして、その後、事例というか、協力・連携・協働の活動シートを皆さんに書いていただいて、おやまちプロジェクト以外にもいろいろ地域と学校が連携した活動がありますよ。そういった事例を持ち寄って、いろいろ議論しましたというのが第1章です。この会議で議論する内容の現状認識や事例を確認するという部分です。

第2章は、前回、前々回とワークショップを重ねてきまして、最初は、地域グループ、学校グループに分かれて、2回目で少しメンバーをシャッフルして、実際にどんなことが課題なのか、あるいはどういう解決策があり得るのかといったことを議論しました。この辺は前回もまとめていたので、改めて見直してみて、何か問題があればぜひ御指摘いただければと思います。

今回は主に第3章です。この辺で連携シートみたいなことをまとめています。これがそのときグループで議論した付箋図ですね。グループワークの結果などを踏まえて、皆さんにも整理していただいたんですけども、これが、そのとき、グループワークで議論した項目をまず整理しています。「連携・協働する意味や必要性とはなにか」、そもそも何で連携するのか、どういういいことがあるのか、「地域と学校をつなぐ存在とは」、「連携・協働のデメリットと阻害要因とは何か」、うまくいかない理由も挙げています。地域と学校は対等でなければならないのか。要は全く同じ、ウィン・ウィンの関係でなければいけないのか、そのような議論に分けて整理しています。

全部挙げていくわけにはいかないので、項目だけです。まず、「連携・協働する意味や必要性とはなにか」というようなことです。ハイライトは私がいいなと思ったところを描いているだけなので、気にしないでいただければと思います。連携・協働のコツみたいなものも結構書かれていたりして、どういう未来をつくりたいのかみたいなものをそもそも議論したほうがいいのかとか、教育とか学校というよりも、おやまちプロジェクトの場合、尾山台の暮らしをもっと豊かにしていく。これは、全ての世代の人がいい人生やいい地域生活を送っていくというところが課題解決ではないアプローチなのではないか。偶然等ですね。取りあえずやってみて、それをしっかり振り返ることが大事だったりとか、ここは私も大事だと思うんですけども、何で連携とか協働が必要かということを考える

と、質のいい教育をすとか、地域の力を借りて子どもたちを育てる。いろいろあるかと思いますがけれども、結局それは、今もそうであるし、実際に子どもが成長して、社会を担う、地域を担う存在になっていくことも含めて考えると、ずっとその町が持続可能。住み続けられるというのは引っ越さないということではなくて、大きな意味で言うと、この世界が行き詰まって、続かなくなってしまうのではなく、将来世代にわたってずっと継続できるような社会システムにつくり変えていかなければいけないという意味だと思うんですけども、大きくいくと、住み続けられる持続可能なまちづくりのために教育もあるし、いろいろな地域の活動があるのではないかと、そんなことも議論されました。

「連携・協働のメリットとは」についてもいろいろ挙がっています。この辺も、皆さん、御確認いただいているかと思います。

「地域と学校をつなぐ存在とは」は、やっぱり実際につなぐ、ジョインターとなるような人が必要なのではないかという議論も結構重ねてきました。

とはいえ、完全にオープンにするのは難しいので、その信頼関係とか安心安全。でも、無条件にオープンにすると非常に問題のある人も入ってくるので、そういうリスクをどのように見るのかというようなことも議論しています。

この辺も非常に重要な議論ですよ。「地域と学校は対等でなければならないのか」、何かを提供したら、その分、返してもらわないといけないのかみたいなモデルで連携を考えると、どちらも苦しくなってくるのではないかというような議論でした。地域のウィンが多かったり、学校が提供してくれているものが大きい場合もあれば、地域が学校に協力することが大きくなっても、それは構わないのではないかと、こういった議論もあったかと思っています。

ここからが今日の議論の中心だと思うんですけども、では、どうすればいいのかということ。大きく3項目に整理してみました。私もおおよそその分け方でいいのではないかと考えています。方策の1つ目として、「連携に必要なジョインターの育成とネットワーク化」。つながりをつくるためにはハブになる人が必要で、その人が地域にどんどん増えていったりとか、ハブになっている人同士がつながっていくことが重要なのではないかという話です。それについていろいろな方策案が挙げられています。

第2番目の方策、大きな項目としては「誰もが参加できる環境整備」ということで、特定の人だけではなくて、より多くの人オープンにいろいろな人に出会えるという会、場をつくったらいのではないだろうかということです。入りやすい場所とか、みんながや

りたいことを話し合えるような場所。

3つ目として、これもすごく重要かと思いますが、従来と一緒に何かを連携してやるという協働作業ばかりではなく、「オープンイノベーション」という言葉を使いましたけれども、いろいろな人やほかの資源、ほかの人が持っているものを使わせてもらって、これまでできなかったことができるようになってくる。そのような物事のつくり方が必要になってくるのではないだろうかというような話がありました。これは私、基本的には賛成で、やっぱりネットワークが広がっていく。特に人と人との出会いはランダムではなくて、誰かを介して出会うことが圧倒的に多い。そのときに、いつも一緒にいる人たち同士と一緒にいると同じような人しか会わないんですけれども、ちょっと遠くのネットワークの人とつながることで、これまでになかった発想とか、出会わなかった人と出会いやすくなる。そういうネットワークの考え方がありますけれども、それがすごく大事で、それをどんどんつくっていくにはどうしたらいいのか。それから、人を通じて出会うんだけど、実際に誰かに紹介して出会うのには限界があって、誰かの知り合いの知り合いと一緒にいられるような場所ですね。そういったオープンな場が意図的にできることで、それまで以上にいろいろな人、多様な人に会うきっかけがかなり生まれるのではないだろうか。

オープンイノベーションは大事だと思います。いろいろな人が出会って、これまでどおりのやり方でやると、学校には教育目的でない人は入れませんとか、教育するためにどれぐらいお金をもらえるんですかとか、そういう従来の取引関係になってしまうと、なかなか取るものも取らなくなってしまう。これはすごく重要なことですが、事務局の方にオープンイノベーションについての補足説明を入れていただいていて、非常に分かりやすいのではないかと思います。ここをそのまま読むと「オープンイノベーションの提唱者であるヘンリー・チェスブロウの著では、『自社だけでなく他社や大学、地方自治体、社会起業家など異業種、異分野が持つ技術やアイデア、サービス、ノウハウ、データ、知識などを組み合わせ、革新的なビジネスモデル、研究成果、製品開発、サービス開発、組織改革、行政改革、地域活性化、社会課題解決などにつなげるイノベーションの方法論』である」と。大事なのは、自社だけでなく、いろいろな人が持っている技術やノウハウを使ってやっていくんですよ。平たく言えばこういうことです。外部の人のアイデアとか資源を使った新しい価値をつくります。おやまちプロジェクトは、まさに学校の外にあるおやまちプロジェクトや学校の外で授業を行っている商店や企業、あるいは大学と一緒に新しく授業をつくることによって、中学校、中学生も喜ぶし、これまでできなかった教育がで

きるし、大学の外の事業者もこれまでのやり方とは違う形で住民の方と接点ができて、ひいては本が売れたりする。大学生にとっても大学の中だけではできない貴重な経験や研究成果につながる可能性のあることを一緒にできる。このような物事のつくり方がオープンイノベーションと言えるのではないかということです。

そう考えると、さらに、これまでの地域と学校の連携というのは地域足す学校が協力するということだったけれども、もしかしたら、地域と学校が持っているそれぞれの資源を持ち寄って新しく何かをつくっていく。連携・協働というより「共創」、共に何かをつくり出すという取組として大学と地域の連携を改めて捉え直していくといいのではないかということを書いています。ここに行くためには「動的コミュニティ」と書いてありますけれども、要は関係が決まり切った形になっているわけではなくて、そこに絶えず住民の皆さん、新しい人が飛び込んできるとか、地域の外の人とつながりやすいとか、そこで暮らしているいろいろな人の関係性に動きがあることが大事だし、相談をしに行くというのが私はすごく大事だと思うんですけども、おやまちプロジェクトに小学校や中学校の先生が相談に来るんですね。この授業はどのようにやったらいいでしょうかみたいな相談に来て、では、こういうことができますよと言うと、あっ、そういうことができるんだったら、この事業の枠組みをこのように変えて、もっとこのようにしてみたらよりいいことができるねみたいな感じで、自身が変わることをいとわない姿勢がすごく大事だと思うんですけども、去年はこういうことをやったから、今年も同じことをやって、そのために外の資源を使うのではなくて、これまでにないものがあるんだとしたら、それを使ってこれまでと違うことをやってみようというような姿勢も含めて、動的なコミュニティーという物の考え方が大事になってくるのではないか。

「14歳のファーストプロジェクト」というのは、本屋さんとか、中学生とか、いろいろな持っているものを混ぜこぜにして、結果的にこれまでできなかったことができるという枠組みなのではないかということです。

ということは、個人個人の内的な動機づけを大事にして、こんなことがやりたいんだ、それを言ったり、受け入れたりすることができるような場所があると、いろいろな持っているものがくっつきやすくなる。おやまちプロジェクトに何度も出てきましたけれども、取りあえずやってみる。失敗を恐れないというか、やってみて、駄目だったらやり方を変えようというフットワークの軽い姿勢があれば、いろいろなものが出会ったときにまずはやってみようということが起こる。検証、やりっ放しではなくて、あるいは1回やると決

めたら、そのままずっと同じやり方をやるのではなくて、やってみて、駄目だったら柔軟にやり方を変えていこう。そうすると、さらに自然に合わせ方が変わって行って、どんどんスパイラルアップしていく、それが活動につながっていくようなサイクルですね。これまでの形とはちょっと違うような、少し柔軟な、動きのあるサイクルを繰り返すことで、人もネットワークも、活動も増えていくし、それを通じて、より何となく知っている人の数が増えていく。すなわちインフォーマルなんだけれども、よりリスクの低いコミュニティができてくるのではないかな。このようなことをまとめています。

ちょっと話が長くなりましたけれども、事務局、何か補足などありましたら……。私の御説明では拙い部分もあったと思いますが、そこはぜひお願いできればと思います。

○事務局 ご説明ありがとうございました。参考までに事務局が作成したものもありますので、それをどういう扱いにするかというのはこれから御議論いただきたいと思います。直接皆さんの意見交換にはなかったかと思うんですが、おやまちプロジェクトの高野さんのお話なんかも含めて考えると、多少こういう図なんかがあってもいいのかなということで作成させていただきました。必ずしもこれを入れてほしいということではありませんので、参考程度ということで御覧いただければと思っております。

○議長 ここからいろいろな御意見をいただきながら議論していけるといいかなと思います。いかがでしょうか。全体的な感想でも結構ですし、より詳細にその図の描きっぷりとか、意味合いや言葉遣いでも、どんなことでも結構ですので、お気づきの点がありましたら、お願いします。

すごく個人的なコメントですけれども、おおむねすごくいいなと思っています。ただ、ジョインターという言葉がどういう人なのか、どういう役割を担うべきなのか、どういう状況になるとジョインターとしての役目が果たせるのかみたいなのがもう少し具体的に書けるといいなとは思いました。

ついでにもう少し話題提供をすると、今回のお話は、ちょうど今、私の研究室の修士課程はあしたが修論の提出期限なんですけれども、大学院生の研究と一緒にというか、おやまちプロジェクトの研究をしていて、おやまちプロジェクトというのは、商店街とか、小学校とか、いろいろな人が集まってやっているプロジェクトなんだけれども、誰かが旗を振ってやっているわけではないにもかかわらず、いろいろなことが次々と起こっていくという状態になっている、何でなのという話。創発性のあるコミュニティになっている原因とか、理由とかをネットワーク、人と人とのつながり方に特徴があるのではないかなという研

究をされていて、すごい面白いんですけれども、これが大学院生が描いたおやまちプロジェクトの最初の段階の図なんです。発起人が4人いて、つまり商店街、小学校、大学、地域住民という4人が集まったんです。このときに何が起こったかという、これが私だと思うんですけれども、大学生の集まり、地域外のいろいろな専門家。私の知っている人はこういう領域に広がっていて、これは商店街の方。高野さんが知っている人というのは商店街関係とか、全国のまちづくりの人たちに広がっていて、学校の校長先生は、お父さん、お母さんとか、子どもとかとつながっていて、おやじの会のお父さんや留学生とかが発起人の保護者のつながりの中にいると。この4人が出会うことによって何が起こったかというと、学生と店主とか、店主とお母さんとか、留学生と小学生みたいなものが俄然出会いやすくなるということなんです。これがネットワークのハブになるとか、構造的な空隙が埋まる、ストラクチャーホールがつながることによって、ハブになる人を通じて、本来遠くの立場の人たちがすごく出会いやすくなるのがネットワーク図から示されている。

これはネットワークの話で、もう1個は方策2の場の話なんですけれども、これは何かというと、赤い点が人なんです、青い点がイベントなんです。Barおやまちとか、ホコ天とか、いろいろイベントというか、人が集まる場が青い点になっている。その青い点に参加している人を結んでいくと重なっているんですね。このイベントにはこういう種類の人しか来ないとかではなくて、いろいろな人が参加しているし、別の場所でも、全部一緒ではないんだけど、重なって参加できる。つまり何が起きているかというと、本来会わない人が、1人介して知り合いであるという状態で誘って、来れば？と言うと知らない人同士が同席できるんです。そこで交流が生まれて、接続が起こるし、いろいろな種類の場があることによって全然違う集まりになったり、あるいは、この間、あそこで会った人ですよと違う場でもう1回会う。こうすると関係性が深まって、これがおやまちプロジェクトでほうっておいてもいろいろなことが起こっていく要因なのではないかという研究をされていて、まさに今ここで議論している学校と地域が連携するためにはそのネットワークを広げて場をつくって、オープンイノベーション、いろいろな人が気軽にいろいろなことを始められる後押しをしましょうと。すごくそれを裏づける研究なのではないかなと思っています。最初に会った何人か、それぞれの背景にあるネットワークがワンアクションでつながる状態になっていって、そこに場があったりするので、そこでいろいろなことが動き始める。これが動き始めていくと、外にいる人たちが面白そうだなと思って、来る

んです。そうすると、最初はパーソナルなネットワーク、1人1人の個人で参加していたものが、地元のクリニックが参加するとか、小学校が相談に来るとか、一緒にやろうというような外部の企業、団体が参入していく。その誘因になっているのが動的なコミュニティ、いろいろなことが起こり続けているコミュニティなのではないか。これもまた長くなってしまう、恐縮ですけども、話題提供でした。

すみません、皆さん、御自由にいろいろ御意見いただければ幸いです。

○委員 非常にまとまっていて、すばらしいんですけども、最後のほう。いわゆるオープンイノベーションの図とか、最後のシステムのサイクルみたいな図は、論文のための最後の結論のこじつけみたいな、ちょっとまとめ過ぎかな。そこまでは議論は発展していなかったような気がするし、これはちょっとこじつけかと思っています。

それ以前の地域と学校の結びつきというのは、ここでは「ジョインター」という言葉を使っていますけれども、学校から見ればキーパーソン、その地域の中心の人をつかむ、あるいは中心の人によって動いているところをつかまえるんだよというところに皆さんの議論は結構行っていたと思うので、その辺が大事だよという結論。そういう人たちの育成、そういうのもまた、PTA出身者が多いのでPTAは大事だよというような結論に達していたので、その辺のポイントを指摘するぐらいでいいのではないかなと思うんですけども、どうでしょうか。

○議長 循環のところは、載せるにしても、もう少し精査したほうがいいのかなというか、使えるようにというか……。理想的にはこうなだけどもというよりかは、既に起こっていることがこのようにつながっていくといいねという、現場で創造できる、置き換えられるようなものになっていくとよりいいですね。

○委員 大変丁寧にまとめていただいて、ありがとうございます。ただ、私たち今期の社会教育委員が、どんなことをやったのかと人に聞かれたときに、説明ができるような本当にシンプルに……。この難しいと言っては失礼ですけども、長いものを全部ひも解かなくても、平易な言葉で、どなたにでもお伝えできるようなところも……。前回のときも私、ワークショップをやったり、いろいろなことをやっていたので、そういうことは伝えられたんですけども、例えば目的だったりとか、おやまちプロジェクトを見学に行って、現状こういうことやっていたんだよ、今度はいろいろな地域でこういうものが広がっていくといいねという、要はそんなところだと思うんですけども、その辺の大事なところ。私たち社会教育委員が2年間やってきたものを自分の言葉で伝えられるようなところをまたちゃん

としていったほうがいいのではないかなと感じているので、その辺の押さえどころも教えていただけたらありがたいなと思っています。

○議長 大変重要な視点ですね。こういうことが大事なんだよ、このようにやっていくといいよねみたいなことを話せるようにならないと、口に出せるようにならないと、なかなか実態化しないというか、伝わっていかないと思いますので、その辺のアイデアをぜひいただけると大変ありがたいです。

○委員 報告書（案）の作成、本当にありがとうございました。大変御苦勞があったんだと思います。今まで出てきたお話とはつながらないと思うんですけども、率直な感想というところでお話をさせていただければと思います。

方策１の連携に必要なジョインターの育成とネットワーク化の方策案①なんですけれども、私、これを読んだときにちょっとここが引っかかってしまいました。それは何かというと、方策案①で地域の各種イベント等にＰＴＡ（保護者）を参加させ、育成するしくみという言葉なんです。引っかかってしまったのはそこです。なぜかという、参加させということで、現役の保護者、ＰＴＡに何かを強制するようなニュアンスになってしまわないかなということです。今、ＰＴＡの入会は任意ということがすごく強調されていて、会員を確保することにとっても労力を割かれているような学校、ＰＴＡもあると聞いています。本校においてもＰＴＡ活動の価値、大切さをよく分かっている会長さんをはじめとした役員の方々なんかは本当に苦勞、努力されて、会員をきちんと確保してということで、本校は最悪でも１００％近い加入率なんですけれども、今はそういったところに労力を割かざるを得ないＰＴＡに対して、また地域に必ず出てきなさいみたいに言われてしまうのかというようなニュアンスを与えてしまう表現は変更したほうがいいのかと思いました。参加させというよりも、現役の保護者がＰＴＡに無理なく参加できるような構造をつくっていくんだとか、そういう無理なく参加できる仕組みをつくっていくことが大事だよというようなニュアンスにしたほうがいいのかと思いますし、私もこれまで、本校のＰＴＡなんかは学校とＰＴＡが協力して、できるときに、できる人が、できることをやっていこうというふうに掲げていますので、そのようにしたほうがいいのかと思いました。

おやまちプロジェクトも、まさに無理に参加させるというよりは、その局面、局面に集った方が楽しみながらやっていくことができ、なおかつネットワークが広がっていくすばらしい取組だと思いますので、そういった方向性で書いていったほうがいいのかと思いました。

○議長 大変よく分かりました。確かにそのとおりですね。こう書かれた瞬間、参加した  
くなくなると思いますので、ありがとうございます。

○委員 拝見いたしました、とてもよくまとめてくださっていて、長かったですが、一通  
り目を通してきたんですが、委員がおっしゃった件は私もちょっと気になったところです。  
これは前々回ですか、PTAの方々の現状というものは先生方もよく御存じですし、今の  
PTAの状況は非常に難しいところもありますので、自分から入りたいという意思で入っ  
ていらっしゃる分にはいいんですけれども、少し義務的な感じとか、強制的な感じのニュ  
アンスの言葉は避けるべきかなと思いました。それがあちこちに散見できるので、やはり  
その辺は、文言等、もう少し検討の余地があるかなと思います。

第3章なんですけれども、課題抽出・整理とまずあって、具現化して、5つの課題を抽  
出し、整理したと。今までいろいろ議論してきた中で分けて、それはすごくいいかなと思  
いました。それを受けて、一提言一地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくり  
に向けてということでもまとめているので、この構成や流れはいいのではないかなと思いま  
す。中身についてはまだまだ検討が必要だと思いますが、そのように思いました。

○議長 続けて、ジョインターが大事だということは大賛成ですが、より重要なのは「ジョ  
インター相互をネットワーク化する」と方策1で書いてあって、多分それが大事なのでは  
ないかなと思っていました。つまりジョインターというか、コーディネーターというか、  
つなぎ役になる人だけだとつなげることには限界があって、ジョインターが既に知っている  
人同士しかつながらないんですけれども、ジョインターというたくさん知り合いがいる  
人同士がつながることによって、そのジョインター自体が知らなかった人に知り合える可  
能性が格段に高くなるのが大事だなと思います。

一方で、ジョインター同士をネットワーク化することが具体的にはどのようなことなの  
かというのがまだあまりイメージできてなくて、もし事務局の方で補足とか、こんなこ  
とができるのではないかなみたいなアイデアがあれば、議論の呼び水として教えていただけ  
るとありがたいなと思います。

○事務局 報告書34ページの方策1では、今言われたように連携に必要なジョインターの  
育成とネットワーク化と記載があるんですが、実は35ページの方策案②に社会教育委員の  
会議主催によるシンポジウム等の開催と。次年度、こういうことができるのかということ  
もそうなんですが、まずはきっかけとして、社会教育委員の会議主催でシンポジウムみた  
いなものを開催しながら、地域にジョインターというような人たちを集めて行っていくこ

とで、そこで学んだことをそれぞれの地域に持って帰って、36ページの丸で地域のジョインターによる開催。今度は地域のジョインターがそれぞれの地域でシンポジウム等々をやっていくような流れに、ここでは書いてあるんですね。それをきっかけに、例えばですけども、5つの総合支所単位で開かれていくといいのではないかな。そうすると、地域全体が共有目標を示すような形にもなるのではないかなというふうにつながっているというか、そういう流れになっていると思います。

○議長 逆にこの辺のところではそういうやり方もあるでしょうし、もっとこういう方法を提案したらいいのではないかなというような議論もあるといいですね。このあたりは、この会議のディスカッションの中では、それほど具体案としては考えてきていない部分だと思いますので、これまでの課題、問題点やこういうことを気をつけるとよさそうだねという議論を踏まえて、実行案についてはどんどんアイデアを付け加えていけるのではないかなと思います。

これは誰に向けて言っているのか、だんだん分からなくなっていくという……。この報告書を読むのは誰なんだろうかと。方策1にしても、2にしても、ジョインターを育てて、つなげるという役目を果たすのは一体誰なのか、あるいは方策案②のですね。誰もが「やってみたい」を発信し共有できる場の提供は一体誰がをつくるんだ、あったらいいけれども、誰がやるのかが分からないというのでは永遠に実現できないので、こういう人にやってもらえるといいね。学校関係者向けのことなのか、あるいは学校に関わりたい地域の方、関わってほしい、あるいは協力してほしい地域の方向けなのか、まちづくりに関心ある方なのか、その辺をもう少し具体化するといいですね。

○委員 ジョインター同士の連携とか、シンポジウムとか、新たな活動の提言みたいになっているけれども、そのことで気づいたのは、今の学校には学校協議会があって、まさしくこれが、成り立ちは違っても、ここでやろうとしていることは、いわゆる学校協議会ではないかなと思うので、もう少し現状に照らし合わせて、報告書にあるようなことをやるには学校協議会をもっと利用していこうねみたいな、現状とがらりと変えるのではなくて、現状を利用した何かに結びつけたほうが有効的なのではないかなと思うんですよ。全然成り立ちは違っても、ここでやろうとしていることは絶対学校協議会なんです。学校協議会自体もそういうことのためにあるんだから、もう少し利用していったらいいというようなことを盛り込んでもいいと思います。

例えば「地域の未来を考える会」って、いい名前で、学校協議会をこういうものに全く

変えても、成り立ってしまうかと思うんですよ。「地域の未来を考える会」をつくっても、そこに参加するメンバーは多分同じだから。そんな現状、今ある実態を少し発展させる形にリードしていったほうがいいと思います。

○委員 今、学校協議会というお話がありましたけれども、学校協議会の時間を使ってというのも、学校の経営方針ですとか、いろいろな説明をされるとか、割と身近な学校について協議されることが多いと思いますので、私は今回のコロナ禍で、なかなか前期のようなわけにいきませんでしたけれども、我々社会教育委員でせつかくこれだけ議論して、考え合っているんで、私たちのような委員が企画するなり、あるいは社会教育主事の方々が教育委員会にもいらっしゃるわけです。そういう方々に各支所等でもう少し現実的に働きかけていただくというか、企画してやっていただくことがいいのかなと思います。社会教育主事の方は、PTAの方々とも、青少年委員の方々とも、学校ともつながっている。そういう接点がありますので、今はコロナ禍で、会議さえもできないという状況でありますけれども、誰がという部分では、働きかけをするのはこういうことを考えている者。あとは事務局の方々というか、社会教育主事の方々というのは、その働きかけをする大事な存在になるのではないかなと思います。

○議長 オープンイノベーションという言葉がいいのかどうかはあれですけども、要は連携をすること自体の在り方を捉え直そうとすること自体が、教育委員会なり、社会教育主事さんたちがそのフレームワークを体得して、アクションを始めてみることは非常に実効力が高いだろうなと思っています。そのお立場でできるアイデアみたいなものが豊かになっていくといいですね。

逆に学校側、地域側から見たらどうなのかとか。方策って、あったらいいよねというか、それ自体、けしからぬとは言われませんし、何も起こらないと意味がないとは言いませんけれども、結局報告書をまとめて終わってしまうことにもなりかねませんから、できれば少しでもインパクトがあるといいなとは思っています。

報告書をまとめる時点で話が盛り上がるというのもなかなか難しいですけども、お気づきのことがありましたら、とにかくテーブルの上に出していただけるといいのでは……。この後、じっくりまた読んでいただいて、コメントを送ってくださっても結構だと思いますけれども、次回はもうほとんど確定になってしまいますので、よろしければ、まだ御発言のない委員の方も、一言、二言いただけましたら……。

○副議長 今までのお話を伺っていて、私もジョインターという言葉は少し気になりまし

た。学校支援コーディネーターとどう違うのかとか、たださえパイプ役をやっている方は現在たくさんいるので、ここら辺はあれっ？って思うかもしれないですね。社会教育法上、地域学校協働活動推進員というのが一応いますよね。それがこのジョインターと呼ばれる人なんですか。そこら辺がちょっと私も疑問に思っただけで。コーディネーターとか、同じような概念があるので、ちょっと言葉を整理する必要があるかなと思いました。

あとは、社会教育委員の会議主催によるシンポジウム等の開催と書いてあって、出てくる人は多分ほとんどが一緒になってしまって、多分既存の学校協議会。私も参加したことがあるんですけども、謎だったんですよ。あれっ？また同じ人がいるよ、こちらも同じ人がいるよという感じなので、もしかしたら地域学校協議会とかいう名前に変えて、発展的に組織改正をしたほうがいいのかなと思ったりしているんです。そこを中心に、それぞれの支所ごとに活動を報告し合って、そのアイデア。こうしていきたいんだけどもなとか、そもそもそういうアイデアを発露する場が多分ないんですよ。今これで困っていますとか、こういうことをしたいんだけども、どうにかならないかなとか、多分そういう場として、まずは社会教育委員の会議主催によるシンポジウム、その上で、恐らく社会教育委員の人って各支所から出されていると思うんです。その人が中心になって、じゃ、それぞれの支所ごとに地域学校協議会とか、そういうものを使いながら、これから取り組んでいきたいこととか、現在困っていることとかを発信していくというのがいいのかなと思うんですよ。学校協議会には何度か出たことがあり、確かにいろいろ報告し合っているんだけども、形式的に終わってしまって、私が聞く限りでは阪神・淡路大震災をきっかけにできたと同っているんですけども、合同学校協議会というのがありますよね。なので、別にまた何かをつくるではなくて、そういう既存の組織を整理しながら考えていったほうがいいかなと私は思いました。事務局のほうで何かあったらお伺いしたいんですけども、そういう既存の組織との関係とか。もしかしたら、学校協議会は所管が違うんですか。

○事務局 これはあくまでも皆さんが検討した部分での報告書になりますので、あまりそういうところはお気遣いなく、このようにしたらどうかというのを記載されたほうがよろしいかと思うので、前回の会議でもお話がありましたけれども、分かりやすい表現とか、そういうことも含めて、ぜひ皆さんが感じ、あるいは思っていることを報告書に載せたほうがいいかなと思っていますので、どなたかが方策の部分で盛り込んでいただけると助かります。

○委員 学校というと、小学校が61校あって、中学校が29校あってみたいな話になってき

てしまうと思うんですけども、学校と地域。先ほどお話しあったように、学校運営委員会があったり、学校協議会があったりということで、また学校がそこに絡んでくるとなると、先生方、もう恐々としてしまうのではないかなと思うんです。確かにそこに参加する、例えば私も学校運営委員をやっています、学校支援コーディネーターをやっていますということになってくると、度々お邪魔する機会もあって、またここに1つ増えるのかというふうな気持ちになってしまうわけです。

先ほどお話しがあったように、幾つかの支所の単位とか、そういうところでは駄目なのかなという気がしました。そうすると、私は烏山小学校で、上祖師谷の住所と給田の住所がいるんですけども、給田の住所は給田小学校にもいたりするから、例えば町会だったら給田町会で、2つの小学校にまたがっていますとか、そんな感じになってくるので、支所だともう少し広くなるんでしょうか。そうすると、またそこに集まる人の顔ぶれも少し変わってきたりして、もう少し広がるというんですか。違った出会いがあったりとか、また、その地域独特の特色ある活動というか、1個の学校だと、またかという感じを受けてしまったら、よくないのではないかなと思うので。1個の学校とこれをやらなければいけないということではないかなという気もしてきたんですが、どうなんでしょう。その辺のところ、また元に戻ってしまったら申し訳ないですけども、支所とかを中心にして行うことになれば、先生とか保護者中心ではなくて、もう少し地域を巻き込んだ形で進めていくことができるのではないかなと思ったんですけども、いかがでしょうか。

○議長 皆さんはいかがですか。新しい場をつくっても、参加する人がいつも同じ問題というのは、名前だけ変わって、いつものメンバーが集ってしまうというのはありがちだと思うので、それを乗り越えつつ、負担感もなくできる方向が求められていると思います。

○副議長 私は委員のご意見に賛成です。支所ごとにすれば広くなって、そこで、うちではこういう取組をやっているよ、実はうちの地域にはこういう人が住んでいてねとなれば、それはいいねとか、うちでもやってみたいとか、これに困っているんだけど、誰かいかなというときには、うちにこういう人がいるよというようなお互いの、それこそ少し小さな、身近なオープンイノベーションができるかもしれないですね。だから、私は支所ごとにそういうのをやるのは賛成です。

○委員 要はPTAもくじ引とかで無理くり役員になった方もいれば、PTA活動は楽しかったよと思ってられる方もいらっしゃるんです。だから、幾つかの学校が集まることで、その楽しかったよ的な方たちがそこに参加してくだされば広がるし、中身も濃くなる、

また、そういう人たちからのつながりでネットワークも広がっていくのではないかなという気がしているところです。小学校とか、ブロックの活動などもありますのでね。そうすると、いろいろな知り合いが結構いるんだけど、自分の学校のPTAが終わると、もうなかなかそういう方たちと御縁になるチャンスがないので、もしかしたらそういうのもいいのではないかなと思います。

○事務局 先ほどの報告書の34ページにもあるんですが、皆様、御覧いただいていますでしょうか。34ページになりますが、(1)の方策1のジョインターという言葉は委員が使われたパイプ役という形だと思うんですが、「現在、主なジョインターは、町会や商店街の役員、学校支援コーディネーターや学校運営委員、青少年委員や地区委員、そのほかにも民生・児童委員などが挙げられる。しかし、近年では、これらのなり手が減少傾向にあること」は、もうこれまでも皆さんお話しされていたかと思うんです。

もうちょっとその下に行きますと「PTA経験者がいくつもの肩書を持って活動するという地域は少なくはない」ということです。これは今もお話しあったと思うんですけれども、だから、どうしたらいいのかということになると、先ほど議長からも、じゃ、誰に向けてこの報告書を読んでもらうかといったときに、その地域でのパイプ役になっていらっしゃるような方たちに向けてというのが一番思いとしては強いのかな。ただ、いきなりその方たちに、じゃ、やってと言っても、これは現実なかなか難しいので、まずは社会教育委員の会議が主催して、そういうワークショップ、シンポジウムみたいなものを通して、ジョインターの人たちに学んでいただく。今度はジョインターの人たちが自分の地域に帰って、自分たちが主になってやっていただく。そういうものが少しずつ地域の中で固まっていくと、例えば支所単位でジョインター同士の情報交換会ができるだろうとか、そのような順番があるのかなとは考えていますが、いかがでしょうか。

○委員 私は今やっている方たちはもう手いっぱいだと思うので、新しいジョインターを見つけたほうがいいのではないかなと思っていて、私のような活動をしていて、いろいろ声をかけると、声かけてくれればやるんだけどという方は意外といなくはないので、新しいそういう人材を発掘するためのワークショップもいいかな。なので、課題解決というよりは、楽しいまちづくりの提案みたいな、わくわくするようなワークショップをして、そこに集まった人たちで新たなジョインターをスカウトしていくみたいな考え。ちょっと皆さんの話とはずれてしまっているんですが、PTAに関われなかったとか、引っ越してきたとか、私立の小学校に行っていて地域の学校にあまり関係ないという方たちも結構い

るので、そういった人たちが地域に興味湧くような、楽しくなるようなことを提案して  
いって、そこで社会教育委員とかが声をかけながらピックアップして、こんなことがある  
というふうにやっていくというのもいいのではないかな。ちょっと視点がずれてしまうか  
もしれないんですけども、そのように思っています。

○議長 本当にそうですね。今のジョインターと言われている人ではない人を見つけて  
いきたいですね。

○委員 新しい人材の発掘も大事なことで、地域にいますと、ほとんど金太郎あめなんで  
すね。先ほどほかの方もおっしゃいましたが、これは何の会議かなというぐらいに  
同じ方が出ているというのが現状ですので、そういう意味では、人材はもちろん地域にい  
て、それぞれ活動はしていますけれども、その連携というのを立ち止まって考えるとい  
うことも必要だと思いますが、やっぱり新しい人材も必要なことだと思いますので、そう  
いう点でも、先ほどから出ていた支所単位とかというのは地域というよりも少し広くなる。  
かといって、世田谷区全体となるとちょっと広がって、それぞれ地域の状況が違い過ぎ  
ますので、話題の共有がなかなか難しいというか、共感できない部分もあったりするかも  
しれません。そういう点ではブロック単位のような、世田谷区の青少年委員は地域を8つ  
のブロックに分けてやっていまして、それに5支所それぞれでやっていきますけれども、そ  
ういう単位でやることによって少し広い——といっても、地域的には共有ができる人材が  
集まってくるというのはいいかなと思います。

前期でしたか、ワークショップをやりましたときに、思いもよらない方々が興味を持っ  
て参加してくださって、そして、何か地域に貢献できることがないかというような形で企  
業の方々の参加もあったりとか、いろいろ新たな発見があったんですが、そういう意味  
でも、全体という部分での発掘もいいと思いますし、社会教育委員でワークショップやシ  
ンポジウムをやるというのも1つの方法ではあるかなと思いますし、もう少し具体的な人  
材の発掘とかネットワーク、つながりを考えれば支所単位というのは大変いい案ではない  
かなと思います。

○議長 学校単位だと狭いから支所単位という考え方もあるし、今おっしゃったように世  
田谷だと広いから支所ぐらいの狭い範囲というのは、あるようで、あまりないかもしれ  
ないですね。

○委員 今の広さの話とは全然ずれてしまうと思うんですけども、これは私の印象なの  
かもしれませんが、やっぱり学校と地域というものの連携というところからスタートし

ているような気がしたんですが、いろいろ検討する中でとか、あるいはワークショップをやったりする中で、私の印象としては学校も地域の中の一つというような印象があります。そういった意味で、先ほど出ていた方策2の方策案①「地域の未来を考える会（仮称）」の開催というような発想はすごくいいなと思っています。その地域の未来を考える会の中に学校も入っているような形で考えると、オープンイノベーション的なものにもつながりやすいのかなと感じています。これが1つ目です。

パイプ役というのがジョインターというのか、よく分かりませんが、ジョインター的なことを果たしてくださっている方にまたいろいろなことを頑張っていただくのか、新たな人材を発掘していくのか。その辺は両方とも大事だとは思いますが、そういったことで何か1つ、新たなムーブメントを起こすのであれば、先ほどお話にあった社会教育委員の会主催によるシンポジウムかどうかは分かりませんが、参加してみたいかなるような何かの企画があると、いろいろな地域の人材の出会いの場というものにはなるのかなと思いました。これが2つ目です。

3つ目も全然ずれてしまうかもしれないんですが、この会議でいろいろ勉強させていただく中で、人間は意外と損得では動かないんだなというのを感じたことがありました。本当に多くの人が楽しさであったり、達成感であったり、自分が求めているものに対する自己実現の度合いであったりということで動いてくださる方が世の中にはすごくたくさんいるんだなということも分かりましたので、そういった地域にいる方々が、その楽しさ、達成感、自己実現とかを考えられるような、味わえるような場を社会教育委員の会議主催による何とかというのでできたら、とてもすばらしいのではないかなと思いました。

○議長 地域の未来を考える会は、やりたい人、参加したい人というのではなくて、学校教育関係者以外にもいそうですね。ちょっと違う専門分野の人と一緒に企画をしてやるなんていうことができそうな気がしますね。そうすると、損得勘定ではない人が結構集まってきて、やりがいとか、やりたいことを話しに来てくれるみたいなのところから新しいつながりが生まれそうな……。そういうやり方もあるよみたいなことはぜひ書きたいですね。

○委員 委員がすごくいいアイデアを出してくださったと思うんですが、やはり私立に行っているお子さんとか、お子さんはいらっしゃらないけれども、地域の未来を間接的に考えてくださっている方とか、世田谷区内に住んでいる元教員の方とかもたくさんいらっしゃると思うんです。そういう方たちのアイデアも頂戴できれば、今は忙しい現役の人たちばかり動くのだと、また大変で、行き詰まってしまうんだけど、例えば私の周

り、60代になった人たちはもう孫の世代だったりするので、ちょっと俯瞰した物の見方ができるというか、そんな中で自分も長く世田谷に住んでいます。子どもはもう育て上げて、今度は孫たちの世代。これからどうなっていくのか、私たちは何がお手伝いできるのかしらという人材もたくさんいらっしゃると思うので、イベントと言ったら変ですけども、そういう会に御参加いただいたり、興味のある人に手を挙げてもらったり、これをやらなければいけないというものは特にないと思うんですけども、その地域の特性で、この地域では何ができるかな。

だから、支所といっても、すごく広いですよ。烏山とか、北沢とか、世田谷とかというレベルだと結構な広さになってしまうんだけど、全体を1つに取りまとめる必要もなく、例えば烏山総合支所の中のこの辺りの地域で今こんなことができるよねとか、その中で3つとか、幾つかに分かれていくのは全然ありだなと思っているんです。だから、商店街を中心とした地域ではこんな活動をします、そうでない地域ではこんな活動ができるかもというふうに展開していけたらいいのではないかな。先のことは1つではなくて、集まった人たちそれぞれで考えていく。とにかくそういう人たちを掘り起こしてみるところではどうかなと思いました。

○議長 支所単位ぐらいのスケールで、いろいろな分野の人をピックアップして、声をかけて、1か所に集まってもらった上で、その支所の中でも地理的に近そうな人に一緒に座ってもらいたいなことをやると、一小学校だけで集められるとちょっと息苦しいけれども、支所単位の中で、あっ、近所ですねみたいになると関わりやすそうな気がしますね。

○委員 私は自分の地域で青少年地区委員会に出席しているんですけども、地区委員会の方は、以前、グループワークのときに委員がおっしゃったまちづくりセンター単位の集まりなので、小学校の学区と必ずしも一致しているわけではなく、かといって、自分の住んでいる地域のことはとてもよく御存じだったり、自分の地域に住んでいる子どもたちのことをすごく考えて、いろいろなことをしたいと思っていらっしゃる方が多かったり、学校とのつながりも求めているからだったりするので、地区委員会というのをもうちょっとうまく使ったらいいのではないかなと思いました。

続けて、地区委員会は地区委員会の中での活動がほとんどで、子どもたちを連れてどこかへ行ったりというのはあるんですけども、隣の地区委員会で何をしているとか、支所単位の中でもほかの地区委員会が何をしているとか、会長はほかの会長と合同で会議があったりするんですけども、あまり委員同士の情報交換がないんですね。なので、地区

委員会を代表する委員を何人か、各地区から集めて、支所単位で話をしてもらおうとかいうこともできたら、いろいろなアイデアが出てくるのではないかなと思います。

○議長 いや、地区委員ではない人からすると、近所で地区委員の方に会えるとうれしいですね。当たり前かもしれないですけども、地区委員も、普通の人が参加できるような一般的なイベントとかをされることはあまりないわけですね。

○委員 そうですね。どちらかというと、子ども向けですけども、子どもさんを対象にすれば、その保護者の方も当然参加できるような形にはできると思います。

○議長 あと10分、15分ぐらいでしょうか。アイデアでも結構ですし、まとめ方のことでも結構です。今はネットワークをどうつくるかという話でしたが、誰でも参加できるような環境づくり、場づくりに関わる話。その2つを主にしていましたけれども、オープンイノベーションをどのように実現していくかという後押しもありますし、冒頭、委員から、最後のまとめはちょっとまとまり過ぎなのではみたいなことがありましたので、その辺のアイデア、もちろんそれ以外のことについてもぜひお願いできればと思います。

我々も結構いろいろ議論を重ねてきているので、共創とか資源の掛け合わせと言われて、その事例や実態を想像できるというか、共有できるわけですけども、急にこれを読む人がどのように受け取るかというのはなかなか難しいかもしれないですね。

○委員 書きっぷりとしては、これでいいのではないかなと僕は思っています。どこかに偏っているわけではないので、今までのお話にあるように例えば学校協議会。恐らく防災から始まったんだと思うので、そういうことがあったりとか、学校運営委員会があったりとか、それぞれ趣旨があっていろいろな会があるので、横断的にはなかなか厳しいと思うので、この書きっぷりでいうと、どこかに偏って、そこに力が集中しているわけではないかなと思うので、こんな形がいいのかなとは思いました。

39ページに「学校の役割は『開かれた学校づくり』とあるので、それはそれでいいと思うんですけども、最初の「学校現場は、『学校の働き方改革』があるため」というのは削除したほうがいいかなと思います。開かれた学校づくりと相反してしまうので、これは削ったほうが文脈としていいのかなと思います。

開かれた学校づくりということであったとすれば、35ページのまちの商店と小中学生とのコラボ企画から保護者を取り込むというところにあるんですけども、「売り上げにも貢献することが予想できる」。開かれた学校づくりで小中学生を出して売上げ、これは関係ないことだと思うんです。そこまで期待されてしまうと、それは開かれた学校とはちょっ

と違うかな。だから、人が増えて、あるいは町が活性化することではいいかなと思うんですけども、売上げというところまで触れてしまうとちょっと厳しいかななんていうふうには思いました。

○議長 「売上げにも貢献することが予想できる」というのは、必ずもうかりますみたいな感じに受け取れますね。確かに誰が読むのかとか、誰がやるのかみたいな議論もありましたが、一方でそれがあまり限定されてしまうと、強制ではないですけども、期待感が強くなり過ぎるという意味では、フラットに書くというのも非常に重要な視点ですね。ありがとうございました。

ほかはいかがでしょうか。皆さん、もう一言ずつぐらいいただくとちょうど終わりになり、いろいろ御意見いただいて、まとめていくにこしたことはないと思いますので、必ずしもこうしたほうがいいよという具体的な提案ではなくても、この辺が気になるので、考え直しませんかということでもよいかと思います。

○委員 39ページにあるんですけども、方策3の保護者の意識変換の中にも、最初に委員がおっしゃった保護者に何々させるみたいな言い方が幾つかありますので、こちらの表現も変えたほうがいいのではないかなと思います。「関わらすこと」とか、「関わらせる仕掛け」とか、「関わらせる」という言い方がちょっと気になりました。そして「保護者世代の意識を変えることが大事である」、結果としてはそうなのかもしれないですけども、人の考え方を換えさせるのは結構難しいと思うので、考えを変えてくれるような何かをこちらから仕掛けるという意味で表現できる言葉があればと思います。

○議長 保護者世代の認識を変える……。

○委員 先ほど誰がやるのか、誰が仕向けるのか、誰がという部分では、ワークショップにしろ、シンポジウムにしろ、先ほども支所単位でというお話が出ましたけれども、単発でやるだけでは効果はそれほど期待できないと思うんです。ですから、何回かそういう企画をする。複数回、企画をして、だんだんそういう方向に、あるいは周知されていくことを考えれば、やはり単発ではなくて、少し続けることが必要なのではないかなと思いました。

○議長 単発ではないほうがいいというアイデアなんですけれども、何となく1回で、ワンアクションのことを考えていたんですが、少し継続的なプログラム、取組みたいなことをしてもいいのかなと。おやまちプロジェクトからスタートしているので、全区一律でこうやってくださいというのはどうしても難しいと思うので、最初はそういうことをやって

みたい地域、あるいは小学校に手を挙げてもらって、その人たちの関係性をつくって、尾山台へ来てもらったりとか、おやまちの人が一緒にそこに入ったりとかして、何か月かとか1年かけて、そこでできる取組をいろいろやっていますみたいなプログラムをやるというのもあるのかなと思います。それを最初の年は1か所、2か所でやってみると、あそこの小学校でもやったらいいねみたいなことが、簡単な資料とか、こういうところに気をつけたほうがいいよみたいなことが意外と共有できて、そうすると、自然発生的にやるとか、2年目に手が挙がるとか、そういうことも可能性としてはあるかなと思いました。伴走型みたいな……。

○委員 そうなんです。例えば、まず、社会教育委員あるいは教育委員会で第1弾、第2弾で支所単位とかいうふうに、パンフレットなんかでも、まず第1弾をやって、第2弾でこのようにとやっていって、だんだん周知をしていけば、ああ、なるほど。関わってくださる方や知っている方が多ければ、もっと広く関わっていただけるようになるといううな……。1回やっただけで終わりではないというのはそういう意味で、ある意味、そういう継続的なことが必要かなと思いました。

○委員 おやまちプロジェクトはとてもすばらしいと思っています。ただ、うちの小学校で考えると全然商店街がないので、全くそれをお手本にしてやることは実は考えられないんです。なので、やはり地域の特性を生かしたもので考えていくというのも1つなので、その辺については、おやじの会の人たちなのか、いろいろなそれに関わってくださる方を発掘して、その中でうちの地域では何ができるかなというところも含めて立ち上げる。ただ、その人たちが継続的にやらなくてはいけないというのはとてもハードルが高いことだと思うんですね。だから、支所とか、もしくは先ほど言っていた地区委員会なんかキーパーソン、そのような拠点となってもらって、こういうことができるよねというときはこの人たちが協力しますよ、こういうことができるよねというときは、じゃ、我々がやりますとかいうような、長い目で見たら、そのように一部の人に負担が偏らないほうがいいと思うし、その辺のかじを誰が取っていくかというのはなかなか難しいし、予算も必要になってくると思うので、今は何とも申し上げられないんです。もちろん事例としてはおやまちプロジェクトはとてもすばらしいので、子どもたちがこんなに生き生きと、小学生も、中学生も生かされていますよというところは大きく伝えていって、今度は自分たちの地域で何を進めていくかというところに落としていったらいいかなと思います。

○議長 プログラムというよりも、知らない人に出会うのは実はすごく難しくて、どうやっ

たら近接した地域で、全然会ったこともない、しかも、分野が違う人、そして、できれば気が合う人と出会うかというのは、結構頑張って考えて行動しないとできなかったりするんですね。自動的に会う人というのは、やっぱり会いやすい人に会ってしまうので、最初は活動ではなくても、ネットワーキングだということ言えば、それぞれの地区で会ったことのない人にどうやったら会えるかみたいなことを始めてみるとかでも、スモールスタートとしてはあり得るのかななんていうことを思いながら今のお話を伺っていました。

大体時間になってしまいました。最後、一言ぜひという方がいたらお願いいたします。加えては大丈夫でしょうか。

日程調整をしないといけないですね。次回は2月、来月に開催したいと思っておりますが、いつぐらいがいいか、調整させてください。時間帯は多分同じく6時か、6時半だと思います。オンラインか否かは、まだ分からないですね。

○事務局 オンラインを想定しながら、オンライン用のPCも確保している日程は2月17日です。

○議長 パソコンの具合ですね。

○事務局 はい。それ以外に調整していただいて構いませんので、よろしくお願いします。

○議長 分かりました。ありがとうございます。

( 日程調整 )

○議長 2月18日(金)、25日(金)の2日間を数日仮押さえしておいていただけましたら幸いです。よろしくお願いします。

じゃ、事務局の皆さん、今日はほかに何か連絡事項などありますか。あと委員の皆さんも何か連絡事項や情報共有などがありましたら。

よかったら、冒頭お知らせしたユーチューブのイッツコの番組、ぜひ後ほど御覧ください。小学生、中学生、大学生、いろいろな人が出てきて、面白そうではあるという感じなので、ぜひ御覧いただければと思います。

○事務局 情報提供なんですが、来月25日、13時半から16時で、子どもの貧困対策推進フォーラムせたがや2022というものが行われます。興味ある方は、区のホームページにも載っていますので、ぜひ御覧いただいて、場所は烏山区民会館ホールとなります。参加費無料、1月17日(木)から2月18日(金)までにお申し込みいただいて、先着200名となりますので、御興味のある方は御参加いただければと思います。

もう1点、今日皆さんから大変貴重な御意見をいただいたんですが、御発言いただいた

方々には、メモ程度でいいので、この部分はこのように変更したらいいのではないかと  
いうことを頂けると助かります。どうぞよろしくお願いいたします。

○議長 会議は以上でおしまいにしたいと思います。修正の意見などありましたら、どん  
どん送るようにしてください。次回はいよいよ最後となりますので、皆さん、ありがとう  
ございました。